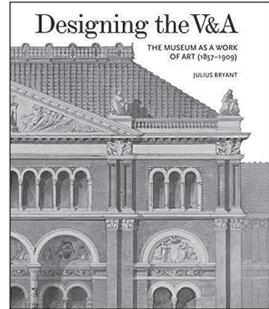


書評

Julius Bryant, *Designing the V&A: The Museum as a Work of Art (1857–1909)*
(London: Lund Humphries in association with V&A Publishing, 2017)

荒川 裕子



2017年、ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム（以下V&Aと略）において、敷地の西側を南北に走るエキシビション・ロードに面して、地上入り口および広大な展示スペースを内包する中庭部分（サックラー・コートヤード）が完成した。同館ではこれまでも、たとえば「中世・ルネサンス展示室」や「模像展示室（カスト・コート）」、あるいは中央の庭園広場（ジョン・マデイスキー・ガーデン）や、「モリス・ルーム」をはじめとするカフェ・レストラン部分など、館内のあちこちで、オリジナルの状態の復元と現代的な新規のデザインとを織り合わせた、大規模な改修が逐次行われてきた。とはいえ、この「エキシビション・ロード・クォーター」の改修プロジェクトは、V&A全体のイメージに決定的な影響をおよぼすという点で、際立って画期的なものとして位置づけることができる。それは、一世紀あまり前の1909年に、敷地の南側のクロムウェル・ロードに沿って、王冠を彷彿させるドーム状の装飾を戴いた正面入り口を含む部分が増設されて以来、ひさびさにこのミュージアムにもたらされた大きな変化であった。エキシビション・ロードとの境目が大きく開放されたことは、向かいに建つ自然史博物館をはじめ、周囲の建物とV&Aとの視覚的つながりをより強めることになった。それによって、1851年の第一回ロンドン万博のあと、この通りを軸としてアルバート公が構想した文教地区、いわゆる「アルバートポリス」の輪郭を体感することがより容易になったといえるだろう。

「エキシビション・ロード・クォーター」のオープニングを記念して、V&Aでは、特別レクチャーや館内ツアー、招聘アーティストたちによるイルミネーション作品の投影など、さまざまなイベントが催された。加え

て2017年5月から翌年1月までの約半年間、本書のもととなった同タイトルの展覧会、「V&Aをデザインする」展も開催された。この展覧会（および本書）では、V&Aの歴史の原点に立ち返って、1857年の同館の創設（当時の名称はサウス・ケンジントン・ミュージアム）から、およそ半世紀かけて主だった建物がすべて完成するまでの軌跡を、関連する油彩画や水彩素描、建築設計図、版画、写真等でたどっている。タイトルに「デザインする」とあるのは、いうまでもなく、V&Aのそもそもの目的が、美的教育を通してイギリス国民の趣味（テイスト）を改善し、生活の質を高めるとともに製造業におけるデザイン性を向上させることにあり、したがって館内に展示される美術・工芸品のコレクションはむろんのこと、それらの器の役割を果たすミュージアムそのものが、多様な素材や技術を用いたデザインの実験の場であり、かつ見本ともなるべきものであったことを意味している。本書の副題「美術作品としてのミュージアム」からもうかがえるように、ここではV&Aの建物それ自体を一個の作品にとらえ、その制作の過程が詳しく紹介されている。

20世紀以降に広まった、いわゆる「ホワイト・キューブ」の整然とした展示空間を見慣れている者にとっては、さまざまなスタイルや素材からなる展示室が迷路のように連なっているV&Aは、魅惑的ながらもきわめて特異なものに感じられることだろう。実際、先にも少し触れたとおり、今日見られるようなV&Aの入り組んだ構造は、およそ半世紀にわたって、複数の建物が少しずつ継ぎ足され、あるいは置き換えられながらかたちづくられてきたものである。こうした段階的な発展のプロセスは、そのまま本書の構成にも反映されているといってよい。

まず第一部では、二つの章「ミュージアムを建設する（1857-1909）」と「美術作品としてのミュージアム」が、全体の総論の役割を果たしている。ここでは、開館当時のシンプルな仮設の建物（通称「プロンプトンのボイラー」）から、エドワード朝時代の帝国主義の風潮を体現しているかのようなクロムウェル・ロード沿いの重厚な建築まで、V&Aが漸次拡張していった道のりがたどられるとともに、ルネサンスのイタリアから同時代のドイツまで、さまざまなスタイルを参考にしながら、レンガやテラコッタ、モザイク、陶器といった多彩な素材によって、デザインの集合体ともいえるべきミュー

ジウムが作り上げられていったようすが概観されている。

続いて第二部では、全部で20の章を通して、言い換えればV&Aに次々に設けられていった20の部分(現在ではその名称や用途、形状等が変わっているものもある)に沿って、このミュージアムの形成のプロセスが示されている。そのすべてについてここで詳しく検討する余地はないが、以下に挙げる各章のタイトルを通覧すれば、具体的にどのような展示室やファシリティがV&Aに加えられていったのかがわかるだろう。「1. 公園用地」「2. サウス・ケンジントン・ミュージアム(1857-1909)」「3. 食堂(1866-81)」「4. 陶器の階段と陶器室(1865-9)」「5. 講堂(1864-77)」「6. 絵画ギャラリーと北階段(1857-66)」「7. ノース・コート(1861-2)」「8. サウス・コート(1861-71)」「9. 『ケンジントンのヴァルハラ』(1862-71)」「10. オリエンタル・コート(1859-64)」「11. プリンス・コンソート・ギャラリー(1862-3)」「12. ナショナル・コンペティション・ギャラリー(1859-72)」「13. フレデリック・レイトンのフレスコ壁画(1868-86)」「14. 東階段(1864-71)」「15. ナショナル・アート・ライブラリー(1879-84)」「16. カスト・コート(1870-73)」「17. グランド・エントランスとロング・ギャラリー(1891-1909)」「18. エドワード朝時代の高層化(1891-1909)」「19. ヘンリー・コール・ウィング(1867-86)」「20. エキシビション・ロード」。

すでに述べたとおり、本書は同じタイトルで開かれた展覧会と連動して出版された。とはいえ、通常の展覧会図録(エキシビション・カタログ)とはかなり趣を異にしている。一般的な図録では、作品のひとつひとつに対して、制作年や素材、サイズ等のデータとともに、(おのおの長短の差はあるにしても)独立した解説文が付されるが、本書においてはそれぞれの作品は、メインとなる文章に対して挿図としての役割を果たすようレイアウトされている。もっとも挿図とはいえ、一点一点の図版には十分なスペースが割かれ(一頁大で載せられているものも少なくない)、細部まできわめてクリアに印刷されており、審美的のみならず資料的な観点からも非常に大きな価値を有している。これらの作品のなかには、初めて紙媒体を通じて公開されるものが数多く含まれていることも、本書の重要性をいっそう高めている。むろん今日では、大規模な博物館や美術館の多くで実施されているように、V&Aにおいても、(本書に掲載されているものを含め)

ほとんどの所蔵作品はデータベース化され、誰でも——わざわざ紙媒体を経ずとも——瞬時にして画像と基本的なデータにアクセスすることができる。だが、個々の作品が担っている歴史的な意義や、複数の作品のあいだの関連性などを探っていくには、ウェブ上で得られる情報だけではとうてい不十分であるのはいうまでもない。その意味でも本書は、比較的よく知られた作品のみならず、これまでほとんど注目されてこなかったものにも十分に目配りし、それぞれのコンテキストを明らかにすることによって、V&A = サウス・ケンジントン・ミュージアムについての、ひいてはヴィクトリア朝の文化行政の理念についての、われわれの視野を大きく広げる手助けをしてくれる。

たとえば、1860年代はじめに館の東側に設けられた「サウス・コート」を撮影した写真(1886年頃、所蔵番号E.1103-1989、本書94頁)は、ヴィクトリア朝時代の博物館建築の内部を伝える記録として、あるいは当時の美術界に君臨したフレデリック・レイトン(1830-96)による巨大な壁画が、もともとどのようなかたちで鑑賞に供されていたのかを示す資料として、これまでもたびたび書籍や論文で取り上げられてきた。それに対して、サウス・コートのすぐ脇に1865年に開設された「ナショナル・コンペティション・ギャラリー」(現在の「写真センター」)の壁面の装飾プログラムについては、本書において初めて、個々の画面およびそれらが表している主題が詳らかにされた(117-27頁)。このギャラリーの本来の目的(国内のアート・スクールの生徒たちが手がけた作品のコンペティションと受賞作品の展示)と、装飾画に描かれた一連の図像には、サウス・ケンジントン・ミュージアムを含めヴィクトリア朝時代の文化行政を主導する立場にあった、ヘンリー・コール(1808-82)とリチャード・レッドグレイヴ(1804-88)が目ざした美術教育の理想が反映されている。そのような視点から眺めると、この一見したところ凡庸ともいえるような装飾プログラムが、実はきわめて大きな文化的社会的意味を担っていたことに気づかされる。

しかしながら、20世紀はじめに同ギャラリーの内装に手が加えられて、もとの建築デザインが大幅に改変されたことや、その折にこれらの装飾画が取り外されたことによって(2007年から11年にかけて修復のうえ再設置)、さらにまた、先に挙げたレイトンをはじめ、エドワード・ポインター

(1836-1919) やジョージ・フレデリック・ウォッツ (1817-1904) など、館内の他の場所の装飾に関わったヴィクトリア朝美術の「ビッグ・ネーム」たちに比べ、この装飾プログラムに参加した画家(フレデリック・リチャード・ピカースギル [1820-1900] やデイヴィッド・ウィルキー・ウィンフィールド [1837-87]、ウィリアム・フレデリック・イームズ [1835-1918] 等)が、それほど知られていないこともおそらく手伝って、ナショナル・コンペティション・ギャラリーの存在は、建築史や美術史の狭間に落ち込んでしまったまま、永らく顧みられることがなかった。本書において、この「忘れられた」ギャラリーに光が当てられたことによって、ヴィクトリア朝の文化研究にまたひとつ、貴重な素材が提供されたということができただろう。

ナショナル・コンペティション・ギャラリーの例に限らず、本書を読んでいくと、ちょうどV&A自身がそうであるように、あちこちに思いがけない出会いや発見が待ち構えている。むろん、V&Aの歴史については、すでに幾つもの本や論文が存在するし、たとえばヴィクトリア朝の文化行政にヘンリー・コールが果たした役割や、レイトンの二つの壁画の図像学的分析など、特定のテーマに絞っていえば、本書よりもはるかに詳しい研究が蓄積されている。だが、V&Aに関わる学芸活動に長く携わってきた著者ブライアントの、豊富な経験に裏打ちされた注意深いまなざしは、この巨大なヴィクトリア朝の宝物箱のなかに、いまだ十分に知られてはいないがきわめて重要なモノやコトを数多く探り当てている。本年5月には、同じ著者によって、本書の姉妹編に当たる『V&Aを創造する——ヴィクトリアとアルバートのミュージアム(1851-1861)』*が刊行された。そこでは、V&Aの誕生前夜からアルバート公が没するまでに、ロイヤル・カップルの(やはりあまり知られていない)数々のサポートにも助けられながら、いかにして同館のコレクションが収集され展示されたのかが詳しく語られている。この新刊も併せて読めば、V&Aという他に例を見ないミュージアムに対する知的関心がいっそう刺激されるに違いない。

*Julius Bryant, *Creating the V&A: Victoria and Albert's Museum (1851-1861)*, Lund Humphries in association with V&A Publishing, 2019.